

悠久の名作シリーズ(13)

『易水送別』 駱 賓王

義を負うて死地に向かう親友を思う

易水送別

此地別燕丹 此の地燕丹えんたんに別る

壮士髮衝冠 壮士髮冠はつを衝く

昔時人已没 昔時人せきじ已に没し

今日水猶寒 今日水猶寒し

意 解

易水での別れ

(君を送る) この易水こそ、その昔荊軻が燕の太子丹と別れたところだ。(そのとき) 壮士荊軻の髪は悲憤慷慨のため逆立って、冠を突き上げんばかりであった。

(この故事にまつわる) 昔の人は、皆あとかたもなく消え失せてしまったが、今日もなお易水は昔のまま寒々と流れている。

漢詩の背景

この詩を理解するには紀元前の戦国時代末期に遡らなければならぬ。「戦国策」や「史記」から要点を紹介します。

・秦の王政と燕の太子丹の交わり

当時強国となって頭角を現わしたのは秦である。秦の国策は天下制覇である。そのために隣国の韓、魏、趙などを攻め、領地を拡大していった。紀元前二四六年に秦王政(のち始皇帝)が即位してから秦は遠方の燕にまで侵略しようとした。燕はそれまでの友好を保つため王政の要求どおり皇太子の丹を人質として秦に送った。実はそれ以前に二人は幼馴染であった。少年時代に出身国こそ違いが趙の国で

人質として苦勞を共にしたことがあった。そういう関係から丹は人質とはいえ、秦へ行っても相応の待遇があるものと期待していた。ところが王政は個人的友好を顧みず、その処遇は冷徹なものであった。運よく秦を脱出した丹は当然復讐に燃えるが、相手は大国である。

・丹の王政への報酬は暗殺

丹は個人的な恨みだけではなく、秦の、弱小国への傲慢な介入ぶりも理由となって王政暗殺を企てた。その刺客に選ばれたのが荊軻という人物である。彼は丹の熱意に負けて「秦の脱国者樊於期の首と督亢の広大な土地」を手土産として赴くことを決意した。出発する荊軻を燕の国境である易水で見送った丹たち官僚の衣は白装束であったという。



戦国時代の国家 (□は戦国七雄)

・荊軻の勇氣

送る方も送られる方も今生の別れである。虎の前に出る羊のようなもの。荊軻は次の詩句を残して出国した。

風蕭蕭として易水寒し

壯士一度去って復還らず

・荊軻その後

荊軻は手土産の土地を示す地図を王の前で広げるやいなや、その紙に隠しくるんでいた匕首で一気に王政の命を奪う計画であった。しかし匕首は王政の胸に届かず暗殺は失敗する。当然荊軻はその場で切り捨てられた。

鑑賞

作者賈王の

思いは誰に

この詩を鑑賞するには、非運の刺客荊軻を追慕する易水の記事を十分認識しなければならぬが、一方作



者とその時代にも思いを寄せなければならぬ。作者賈王の初唐時代は悪名高き則天武后の治世である。語るにあまる権力猛者の武后を滅ぼさんとする將軍の徐敬業（または李敬業）が乱を企てると聞くや、その幕僚となった作者は彼のために檄文を書き、天下に武后の非道をしめんとした。その戦の中で徐敬業をたまたま易水に見送った作者は、死地に赴く彼を、八〇〇年前の荊軻とだぶらせて、その無念さを詠じている。

参考

則天武后の治世

武后は、はじめ太宗（二代目皇帝）の側室として十四歳ごろから後宮に仕えていたが、太宗がなくなると、いったん尼寺にこもらされ、身を清めていたところ、高宗（三代目皇帝）に召し出され皇后の位についた。病弱で文書の決裁が思うようにできない高宗は、頭脳明晰な武皇后にそれらの処理を託すようになった。彼女は見事な決断力であった。武皇后は六六〇年ごろから摂政のように政務をとるようになり、出身門地が低いにもかかわらず天后と称された。高宗が死ぬと彼女は高宗との間にもうけた中宗（四代目皇帝）を位に立てたが、間もなく彼を帝位から引き下ろし、六九〇年に自ら皇帝と称した。そして国名も唐から周と改名した。約五〇年間実権を握った

女帝である。